

令和5年12月15日

南の風 496

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

鈴木氏の考えの続きです。

その都度、私は彼に話をし、時に叱りもしました。

そして、こうも伝えました。私が叱るということは、君はこの責任を果たす能力があると信じているという証拠だ。私が君を信じていなければ、どうせではないと諦めていれば、ここで君を叱ることはない。私は君を信じると決めた自分自身のことを信じている。そして、「責任を果たしてくれると信頼し続ける」。君も自分自身の心の奥底にある誠実な気持ちを信じるべきだ。

彼はそれ以来少しずつ責任感を行動に移せるようになりました。

全員が全員、このように良い方向に影響を受け取ってくれるわけではありません。しかし、「責任を果たしてくれると信頼し続ける」責任が、指導者と選手の間を寄り深いものにするのかもしれない。

鈴木氏は「責任」に関連して、チームを一つに統率するものとして「規律」について、次のように語っています。

偉大な組織になるためには「規律」が必須です。規律なき組織に偉大な組織はないといっても過言ではありません。

チームの「規律」を保つためにはルールが不可欠です。そのルールを徹底するのが規律です。例えば強豪校にはよく「体育館に入るときに靴を揃える」とか「ユニフォームに着替えたなら全員のバッグを並べる」というルールがあります。こういったものが無数にあることもざらです。これを形だけ、表面だけ真似しても意味がありません。それどころかルールを作ること自体が目的になってしまい、やがて強豪校以上のルールによってがんじがらめになるだけです。

そもそも靴やバッグを揃えたからといってバスケットボールのスキルが身につくわけではありません。靴やバッグのルールと強豪校であることはほとんど関係がないのです。強豪校たるゆえんは、まず「理念」があり、それを実現するために「規律」を求めているということなのです。まずはコーチが選手に一番伝えたい、チームの核となる理念を持つこと。そうすればおのずと定めるべきルールは決まるのです。鈴木氏は、ルールとマナーの違いを次のように述べます。

ルールとマナーがあります。ルールは何があっても守らなければならないもの、マナーは守った方がより良いものという明確な違いがあります。

ルールは全員が納得して決め、一度決めたら絶対に守らなければなりません。破ったときの罰則も定め、だれにも公平に適用します。チームのエースだろうと、先輩だろうと例外があってはけません。罰則があるからには守られているかどうかチェックするシステムも必要です。これらはルールで「規律」を保とうとするときに必ずやっておかなければならないことです。

一方でマナーは「こうあることが望ましい」という漠然としたものです。仲間内やチーム内の暗黙の了解のようなもので、行動の指針とっていいかもしれません。 次号にします。